

ネーネーズの『贈りもの』

(2010年9月24日。ライブハウス島唄にて)

評論

海山道人
み やま みち ひと

天使たち

今年(二〇一〇)の2月に国際学会でお世話になったNさんから業務上の連絡のメールを受け取った。末尾には次のように書いてあった。

「7月16日から18日まで沖縄旅行にいきます。

もちろん、ネーネーズ様に癒される予定です。」

僕は次のように返事を書いた。

「彼女達は“ネーネーズ様”というように“様”付けて呼ぶような人たちではありません。話してみればごく普通の女の子達ですよ。



でも、ステージに上がると、“天使”になります」

2010年9月24日の午後の早い時間、僕はまだ真夏の暑気を残す那覇空港に降り立った。迎えに来てくれたO君は、僕がなんとなく嬉しそうにしている理由を多分知っている。そう、僕はこれから天使たちに会いに行くのだ。

メタモルフオーゼン

第1ステージの開始は、長い間「明けもどろ」で、前回来たときには「ユンタ」が最初に歌われた。今回はどうか。

「明けもどろ」も「ユンタ」も島の神様たちと深い関係にある。しかし彼女たちの歌は、どういうわけか神様たちの存在をあまり感じさせない。神様のことを歌っているのに神様のことを感じさせないのは、シニールではあるが本来の姿ではない。だから、今の彼女たちにはオープンングにふさわしいもつと適切な歌があるだろうと思っていた。

今回、コンサートは暗闇から始まるのではなく、ほの暗い照明の中で音だけの前奏(「トウネー」)に引き続き、一転、明るく「コザ Takasa」で幕を開けた。こうでなくっちゃ。続くは「アメリカ通り」である。若い彼女たちのコンサートは、にぎやかな歌で開始したい。動きも歌もはつらつとし、元気いっぱいなのネーネーズの登場だ。

彼女たちは昨年(2009)の1月に変則的な3人体勢から本来の4人

体勢にもどり、短い時間ながらさまざまな試行錯誤を繰り返して、ようやく今、このユニットの形を作り上げたようである。表現力は十分。ただ、比嘉綾乃さんや金城泉さんと与那覇歩さんのいた2年半前と比べると、明るさが増し、陰影の少ない響きになった。若さを考えると当然と思う。こわいもの知らずで疲れ知らずの彼女たちのネーネーズは、古い殻を脱いで新しく生まれ変わったのだ。

成長を続ける天使たち

今回は、平日ながら連休の期間中ということもあってか、お客さんが多い。前後に分かれた客席のうしろの席に、多分沖繩の人だろうと思われる面白い青年がいて盛んに野次を飛ばす。保良さんが自己紹介で「保良光美でございます」というと「てるみちやくん！」という具合に、全ステージの歌の合間やトークの最中に叫び続けるのである。最初は「ほくほく」と元気よかった掛け声が、第2ステージの終わりごろになると「よ〜く〜い」とややトーンが落ちてきた。しかし、彼もさるもの、会話の合間を見て絶妙のタイミングで「いやささー」と叫んだ。即座にステージの上原さんと比嘉さんが反応し、「はいや」と合いの手を入れる。

学芸会のお喋りのようだった彼女たちのトークもすつっかり板につき、客席の反応を見ながら当意即妙に進行できるまで

になつてゐる。見事なものだ。あの上原さんですら、「わたし、何を言っているのかしら」とつぶやいていた頃がうそのようだ。

4月に来たときにはまだ硬さの残っていた保良さんは、すっかりチームに溶け込んで歌い、踊り、喋っている。なにげない三板の扱いもよく見ると微妙な動きでコントロールしており、この楽器が重要な役割をしているのを視覚的にも見せている。

体の小さなネーネーズの中にあつて、相対的に大きく見える彼女は(普通の身長なのだが)、踊ったときの動きがダイナミックだ。隣の上原さんが常に「静」であるので、彼女の「動」がより映える。



それにしても……、歌ったり踊ったりしている時の彼女の身のこなし、足のはね上げ方やその角度などはどう見てもダンスのそれである。ネーネーズとダンス？ ネーネーズは「ウサギのダンス」

をやったっけ？ などとくだらないことを考えたがよく分か

らない。彼女は何かのスポーツの達人なのだろうか？ のびのびと歌い踊る彼女を見て、本来はこういう人なんだという思いを深くした。

前回、見事な百面相を見せてくれた比嘉真優子さんは、百面相ではないものの、やはり豊かな表情で歌うのを見ていて飽きない。徐々になだが、そのおらかな人柄がより前面に出るようになってきた。と同時に（体格の良さも相俟って）なんとなく風格がでてきた。上原さんと双璧をなすおしゃべりは、にぎやかである。

仲本真紀さんは、引っ込み思案で必要な時だけ前に出る謙虚な感じは今でも同じだが、ステージ上で普段の自分以上に元氣に見せようとしていたような気負いがとれて、本来持っている良さが



自然に出てくるようになったように感じられる。太鼓の撥きばきはますます磨きがかかってきた。

上原渚さんは、いつもと変わらず落ち着いたステージ姿で



ある。しかし実は微妙に変わった。大変失礼な言い方だが、今回は、何となく「大人の色香」がほのかに漂っている。2年前の「小生意気なねーちゃん」と同じ人とは思えない。進行状況や全体のバランスに常に気を配り、最初は神妙なふりをして寡黙に、だんだん喋りだして（喋りだすと止まらない）会場全体をリードしていく姿は前回と変わらな

い。

このチームの構成メンバーは若い。初代ネーネーズは結成時にすでに今の彼女たちの年齢を超えていたが、それでも若かった。それよりもっと若い今のチームは、4人になって1年足らずの期間をついやして完成した。

完成した今のネーネーズは、これまでのネーネーズとかなり違う。コンサートのオープニングの音楽を変えなければなら

らなくなったのは、彼女達の音楽に関するセンスを含む総合的な人間性がこれまでのメンバーと異なっているということなのだ。

この日も、いつもと同じように最初から最後までいて、全ての歌を聴いた。帰りがけに、上原さんから新しいCDが出ることを知らされた。その場にいたO君に、出たらすぐに買って送ってくれるように頼んだのはいうまでもない。

新しいネーネーズには新しい歌が必要だ。果たして新しいCDには新しいネーネーズにふさわしい歌が入っているだろうか。

『贈りもの』

O君からCDが届いた。『贈りもの』というタイトルだった。シールを開封して付属の解説書を取り出し、1ページ目に眼を通した瞬間、僕は心の中でニヤリと笑った。クレジットに下地勇の名前を見つけたからだ。

宮古島出身のこのシンガーソングライターは、宮古島方言で詞を作り、メロディをつけて自分で歌う。最初のアルバム『天』の冒頭の「捨ていうかでない」を聴いて度肝を抜かれた僕は、それ以来ファンになった。

文明や文化が異なった文明や文化と衝突したとき、そこに新しい文明や文化が生まれる。音楽も同じだ。初代ネーネー



ネーネーズ『贈りもの』 ディグレコーズ DCA-0009

ズとそのチームは様々に異なった音楽や人と出会い、新しい音楽を生み出し演奏してきた。今度は下地勇とネーネーズの衝突だ。期待がもてないわけがない。

1曲目がタイトル曲の下地勇作詞・作曲『贈りもの』である。予想もしないジャズで始まった。

下地勇は、なつかしい故郷に深く想いをおき、歎びと哀し

みと優しさを周囲にいつぱい振りまきながらまっしぐらに突っ走る人であるように感じる。

基本的に明るい人なのだろう。つらい歌でもどこかにやすらぎを感じさせる。しかし、この歌はどこまでも明るい。彼の明るさが全面的に出た歌である。ネーネーズはジャズバンドのバックに乗りながら楽しそうに歌っている。オーブニングにふさわしい。

2曲目は、知名定男作詞作曲の「アイラブ・ソング・キング」である。嘉手苺林昌に捧ぐ、とあるのでソング・キングとは彼のことであろう。僕は名前だけ知っていて歌を聴いたこともなければどういう人かも知らない。

しかし、嘉手苺林昌（1920～1999）が素晴らしい人であったことはこの歌の歌詞から良く分かる。ただし、品行方正で偉大な人というのではなさそうだ。きつと型にはまらない大きな人格の持ち主だったのだろう。歌詞は彼に対する愛情と尊敬の念にあふれている。曲も賛歌にふさわしく、おおらかで明るい。ネーネーズのメンバーは、いくらウチナー生まれとはいはいえ、彼の声を聞いたこともないだろうが、元氣よく歌っている。

3曲目は、古今琉歌集の詞に知名定男が作曲したものである。「春のワルツ」という題名の示すように、沖縄の古謡をワルツのリズムに乗せたものである。人里はなれたところに一

人で暮らす女性が、自分に言い寄ってくれる男性をじつと待っている感じの歌詞でありメロディである。このネーネーズはこのような歌を歌うとまるで自分たちの歌のような感じで歌う。しみじみとした気持ちになるのは、彼女たちにこの歌の心がしみこんでいるからか。

4曲目も、若い女の子の心を歌った「初恋」である。途中で聴いたところで嘖き出しそうになった。これは「うむかじ」のコミック版とでも言うような作品で、若い女の子が初恋の心の中を吐露する内容の歌詞が、最初から最後まで続いている。ユーモラスな歌詞にびったり寄り添う曲想で、作詞・作曲の知名定男はもうかなりの年齢と思うのに、今でもこんな歌が作れるのだから驚異的だ。ネーネーズの各メンバーの初恋がどのようなものであったかは知るよしもない。しかしここには確かにこの歌の主人公と等身大の彼女がいる。

「ちやーすがやー」というのはどういう意味だろう。多分、「どうしたらよいのだろう」という意味だと思うが、なんともいえず良い響きがある。この曲に限らず、知名の作る音楽は、歌詞とメロディが見事に一体化しているものが多い。

ロシアの作曲家ムソルグスキーは、独特のデクラメーションの技法を創った人として知られる。彼はリムスキー・コルサコフに宛てた手紙の中で、「どこで、誰の話も聞いても、それがどんな話であっても——その話は私の脳裏ですぐさま音

楽として再現されるのです」と述べている（名作オペラブックス24『ムソルグスキー・ボリス・ゴドゥノフ』音楽の友社）。日常のどんな会話も、彼の頭の中では音楽として響いていたのだろう。『ボリス』を聴けば、それはよく理解できる。

会話のイントネーションを損なわずに音楽に載せ、美しく響かせることはきわめて難しい。この歌の詞もおそらく普通の沖繩の話し言葉であろう。それがこのような素晴らしい音楽になってしまふということは、知名の頭の中に、言葉のメロディ化に対する特別な能力があるのしか思えない。ムソルグスキーのようであるのかどうかは分からないが・・・。

5曲目は新良幸人作詞、下地勇作曲の「SAKISHIMAのテーマ」である。冒頭の前奏からして懐かしきにあふれている。アルバム全体を通して、一人ひとりの声はもろろんのこと、4人の声が最も美しく聞こえるのはこの曲だ。新良幸人と下地勇はネーネーズのために特別にこの歌を作ったのだろうか。詞も曲も、先島諸島の美しい風景を眼前に彷彿とさせる。碧い海と小さな島々が目の前に浮かんでくるようだ。そしてまた、彼女たちがこんなに美しく歌えるのは、何か秘密があるに違いない。嘉手苺聡の編曲に拍手。

6曲目は、沖繩民謡の詞に知名定男が曲をつけたものである。「白雲ぬ如に」というタイトルのこの曲は、理想的なものに対しての抽象的な憧れを白雲に託して表しているのだろうか

か。あるいは自由への想いを白雲に託したものであろうか。それとも好きな人に対する思いのたけを綴ったものだろうか。いずれにせよ、さまざまな想いに満ちたこの曲をネーネーズは一途に歌っている。その一途さは人の心を打つ。

7曲目は、下地勇作詞作曲の「風の道」だ。「IKAWU」の作曲者の玉栄政昭が編曲している。この曲は、もはやポップスやロックなどという範疇を超越し、一篇の交響詩とも言うような壮大な世界を構築している。主役であるはずのネーネーズも、作曲者である下地勇も、この中では一部分に過ぎない。

詞はロマンに満ち、意味は深い。音楽は劇的だ。途中から平家琵琶のように入ってきて阿修羅のように荒れ狂う三線、縦横無尽に動き回り絢爛に響きわたるピアノ、のりとのような調子で風がうねるように歌う下地勇、そして「…はっ・はっ・はっ・はっ…」というリズムの良い掛け声が入り混じる中、遥かなる天上の高みにあつて「永遠に」「永遠に」……と歌うネーネーズは、とてもとても美しい。

僕は、これを聴いているうちに、マーラーの交響曲『大地の歌』の最終楽章「告別」を思い出した。「永遠に」「永遠に」……と歌うコントラルトの歌唱もまた美しい。テーマが何であれ、「永遠に」と願うのは人の心の常なのだろう。

8曲目は、知名定男作詞作曲の「コザ！」である。かわい

いロックンロールだ。ネーネーズの歌の中には、「アメリカ通り」など、コザに関する歌があるが、僕はコザに行ったことがない。いったいどんな町なのだろう。昔のコザと今のコザには大きな違いがあるという。行ったことがない僕には、その違いは分からない。しかし、「俺達のコザ どこへ行ったコザ」をロックンロールに乗せて歌う意味はきつとどこかにあるはずだ。

9曲目は岡本おさみ作詞、知名定男作曲の「山河、今は遠く」である。岡本おさみは、常に普通の人の目の高さで詞を書く。弱いものに対する限らない優しさが行間からにじみ出る。この曲も定年前後の普通の男の心の中を、愛情をこめた筆致で描いている。作曲の知名定男もこの詞にふさわしい素晴らしいメロディをつけている。

先代のネーネーズも『愁』の中で、ポップス調で歌っていた。それはそれで味があつたが、このネーネーズは、この歌を、一步一步踏みしめるように、一語一語かみしめるように歌っていく。そのために、詞の一言一言がより意味深く聞こえる。この歌にはこの歌い方こそふさわしい。バックの音楽も格調高く、主人公の心情にそった味わい深いものである。

僕は、この曲をステージで聴いたことがない。しかし、CDを聴きながら目を閉じれば、彼女たちがこの曲を歌っている情景が浮かんでくる。誰が、どこで、どのように歌うかも、

その表情さえも、まるで目の前で歌っているかのように思い浮かべることが出来る。

そのとたん、記憶がフラッシュバックした。

3年前の7月、初めてライブハウス島唄でネーネーズのステージを見た時、3人のお姉さんたちに見守られながら、お客さんを躍らせたり歌わせたり、本当に小生意気なねーちゃんだった上原さんが、2度目に来た時には責任感の塊のようになつて活躍していた光景は見ものだった。3度目、心ならずも3人のネーネーズになつていたとき、比嘉・仲本組の歌の切れ目をじっと待ちながら、2人分を1人で歌う直前の決死の表情の彼女を、僕は決して忘れないだろう。

2人のメンバーが入れ替わっていたのは2度目に来た時である。新たに入ったのが比嘉真優子さんと仲本真紀さんだった。「んちゃ砲」が飛び出してくるのではないかと思われるほど大きな口を開けて歌う比嘉さん。引つ込み思案のように見えてめちやくちや太鼓のうまい仲本さん。3度目に来た時には3人ネーネーズになつていたが、この危機を3人で力を合わせて乗り切った。比嘉さんも仲本さんも来るたびにぐんぐん成長し、もはや堂々たるネーネーズの一員だ。

4度目に来た時に、初めて保良光美さんの歌を聴いた。このときの4人のリラックスした嬉しそうな表情は、いつまでも僕の心に残るだろう。

この歌は、僕にいろいろなことを思い起こさせてくれる。岡本おさみと知名定男が作った名曲は、決して『黄金の花』だけではないのだ。

それにしても、一つ前の「コザ！」とこの曲の編曲と演奏が、同じSKDというグループによるものだと信じられない。この多様性は尋常ではない。ここには様々な可能性を秘めた人たちがいるに違いない。

10曲目は、八重山民謡の「山ばれーゆんた」である。八重山の言葉で歌っているの、意味は一言もわからない。解説によれば、十五夜の晩、村で有名な美女・ヌズレーマを遊びに誘い出した若者達が三線を弾きながら楽しむ様子を描いたものだという。歌詞が理解できないのは残念だ。ネーネーズは、さすがに「一糸乱れず」という歌唱で、この歌が、彼女たちの手中にあることを示している。「返し」のやわらかいバリトンの声は魅力的だ。

11曲目は、沖縄民謡「赤田首里殿内」を知名定男が編曲したものである。わらべ歌であるという。この歌も歌詞の意味はさっぱり分からない。一番一番の曲の最後に「シーヤープーシーヤープー……」という歌詞がくっついており、わらべ歌らしい響きをかもし出している。知名定男の編曲は軽快で耳に心地よい。

12曲目は、知名定男作詞・作曲の『待ちくたびれて』であ

る。恋人を待つ女性の心境をロックのリズムに乗せて歌うこの曲は、今のネーネーズには未経験の世界だろう。知名の詞は女性の心境を良く捉えている。日本語としてはやや奇妙に聞こえる「もつともつと しあわせ したかった」という歌詞は、この女性の本当の気持ちであるに違いない。

13曲目は、知名定男作詞・作曲の「願い」である。沖縄の辿った運命を静かに顧み、万感の想いを「願い」という歌詞に託したものだ。しみじみとした曲想で、仲本政國ジャズオーケストラのゆったりとした伴奏のもと、静かに微笑むようなネーネーズの歌唱が冴える。



このアルバムを聴き終わって最初に感じたのは、「ネーネーズが久しぶりにワールドミュージックの世界の戻ってきたなあ」ということだった。最初のアルバム『IKAWU』以来、沖縄音楽というよりワールドミュージックという音作りであったネーネーズのアルバムは、この数年沖縄に根を下ろした感じで世界性があまり感じられなかった。

しかし、この新チームは、素晴らしいミュージシャンに囲まれ、多くの人に助けられながら、世界に向けて羽ばたこうとしている。まだ飛ぶことを覚えたばかりの若い鳥たちではあるが、世界への、そして未来への扉をすでに開いてしまっ

た。

このアルバムは、これまでのネーネーズの歴史の上に新しいページを刻むであろう。この中には、珠玉のような素晴らしい歌がいくつも入っている。そのうちの多くは単独でもヒットする可能性を秘めている。特に「山河、今は遠く」はラジオで何度も取り上げられ、多くの人に愛されるだろう。これらの歌により、現ネーネーズは全国的に知られる存在になるに違いない。

吉田拓郎はかつて「古い船には新しい水夫が乗り込んで行くだろう」と歌った（イメーজの歌）。次々に旅立っていった先輩のネーネーたちから託されたバトンを受け、彼女たちは最新の機器で機装されたネーネーズ号にクルーとして乗り込んだ。にぎやかな船出だ。きつとあっちだこっちだとわいわい騒ぎながらの航海になるに違いない。

新しい海に乗り出した新生ネーネーズに、幸多かれと祈る。

◇

◇

口になど出さないが

がんばれよ

がんばれよ

（岡本おさみ作詞「山河、今は遠く」より）

附 録……天使たちの会話

コンサートの翌朝、上着のポケットから一枚のメモが出てきた。酔っ払ってよく覚えていないが、曲を聴く合間に彼女達の会話を書き付けたらしい。そのメモにはこう書いてあった。

ヤシガニを食べる。本当は食べてはいけない。でも取って食べる。

ヤシガニは、ヤドカリの殻を取ってこうやって引き伸ばしたみたいなもの（と言って引き伸ばす手つきをする）。

小さいときよく蝉を捕った。メスしか捕らない。オスはうるさいから。

鳴いている蝉の音の出る部分を押さえると音が小さくなる。蝉を食べる。焼いて食べる。味付けはなし。

小さい蝉をフライパンで塩を入れて炒めて食べる。

ヤモリが嫌い。網戸の外にいるヤモリを内側から爪ではじいて飛ばす。おもしろい。

ヤモリは共食いする。

たいてい大きなのが小さなのを食べる。ときどき小さなのが大きなのを飲み込もうとすることもある。どれも指ではじいて飛ばしてやる（と言ってにっこり笑う）。

天使たちの会話は実に天真爛漫なのである。